IEEJ Industry Applications Society News Letter

電気学会産業応用部門（D部門）ニュースレター 2016年11月号 (<http://www2.iee.or.jp/ver2/ias/nl/>)

産業応用部門のロゴマーク誕生秘話と随想

Logo of IEEJ/IAS

電気学会 産業応用部門 元部門長

河村 篤男（横浜国立大学）

Atsuo Kawamura (Yokohama National University)

Past President of IEEJ/IAS

先日、産業応用部門のロゴマークの誕生秘話に関して文章を書くようにとニュースレター（NL）担当の編修広報委員から依頼がありました。調べてみたら、ロゴを決めたのは意外と新しいことに驚きました。2013年11月号のNLに、25周年記念事業電気学会産業応用部門ロゴマーク制定というタイトルのもとに、“ロゴマーク決選投票結果のお知らせ”という記事がありました。大賞が1つ、入賞が2つあります。大賞は東京電機大の吉田先生のご提案のものです。また惜しくも大賞を逃したのは、沼津高専の大沼氏（図1中）、日立製作所の古関氏（図1右）の図案でした。私が部門長の時に、部門ロゴマークの制定提案を部門役員会で行い承認を受けて約半年間公募をして、27作品が集まりました。まずは一次投票としてWeb投票を行って3つに絞り、2013年の山口大学部門大会での会場投票およびWeb投票による決選投票の結果、現在のマークに決まりました。2013年12月号のNLの部門大会報告の記事には、投票数が載っていて、479票の投票があったと書いてあります。ここまでは事実です。この3つのロゴを再度ここに載せました。じっくりとご覧ください。

図1 ロゴマーク（大賞（左）、入賞（中）、右）

この図柄を見て、すぐに思い出したのは、このマークはパソコンの電源マークと似ているのではないかと疑問の話題です。最近の話題では2020年東京オリンピックのロゴマークが別のロゴマークと似ているために、再度制定された記憶があります。当時の部門役員会で電源マークに似ているのではないかと相当議論しました。いろいろと調査や問い合わせをしました。その結果、その電源マークは誰が使ってもよいことがわかり、担当部署に確認を得て、3つ

のマークでの最終投票になったような記憶があります。

それまでは、電気学会のボルト、アンペア、ワットのマークの組み合わせのロゴしかなかったもので、これでやっと産業応用部門も電気学会本部とやや距離を置いて独立独歩の道を歩みだしたような気がして、これからは各部門の専門性を押し出して活動すべきとの機運にもマッチしました。部門大会の参加者が定常的に千名を超えるようになったのもこの時期からです。IPECやICEMSに続いて、第3の国際会議SAMCONの企画や、英文論文誌(JIAS)の発刊を決めたのもこの時期です。部門独立会計の方向もこの頃から認識され始めたような記憶があります。

この原稿を書いている時期はリオのオリンピックの真っ最中でして、連日メダル獲得のニュースが飛び交っています。新聞記事は1日遅れのため、メディア、特にインターネットの情報を頼りに一喜一憂しています。これは情報革命の進行中の現象と言えます。ポケモンGOは世界中で楽しめるし、地球の裏の最新情報も一瞬で入手できます。世界規模の電子マネーも普及しそうです。このような状況はグローバルという言葉で表現されることが多いのですが、情報革命の先は、産業応用革命（Industrie 4.0）だと言って、世間は騒がしくなっています。先日2日間程度飛行機に乗って日本の真反対にあるサンパウロ（ブラジル）に行きましたが、地球という空間も狭くなってきたと感じます。個人のアイデンティティをしっかりと持たないと、地球レベルでの物理的狭さと情報過多の波により、自分のスペースを見失いそうな状況です。このような時代だからこそ、産業応用部門は、会員の技術的アイデンティティをしっかりと確認する場であるべきだと感じています。会員にとっては、日々の業務に追われる現場を離れて、少し将来の技術を考える場を提供しているのが部門大会であり、人的ネットワークを介してその情報を得るのが部門活動であると思います。学生さんにとっては鍛錬の場であり、自分の将来像を見る場でもあります。